



Title	有理函数ニツイテ
Author(s)	清水, 辰次郎
Citation	全国紙上数学談話会. 1934, 9, p. 10-none
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73863
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

26. 有理函数 = ツハテ

清水辰次郎 (阪大)

全有限平面テ meromorphic 函数 $f(z) = \text{対シテ}$

$$A_1(z, f) = \frac{1}{\pi} \int_0^x \int_0^{2\pi} \frac{|f'(z)|}{(1+|f(z)|^2)^2} \rho d\rho d\theta, \quad z = \rho e^{i\theta}.$$

トオケハ

$$\int_{\epsilon}^x \frac{A_1(t, f)}{t} dt = T(x, f) + O(1)$$

テアル。コハ = $T(x, f)$ ハ $R, Nevanlinna$ カ有理型函数ノ理論ニ導
 入シタ函数テアル。筆者ハ数学輯報 1929, 第6卷, 第1号 129頁テ
 $f(z)$ カ有理函数トハ $A_1(x, f)$ カ有界トナリ。逆ニ $A_1(x, f)$ カ有界トハ $f(z)$
 カ有理函数トナレコトヲ示シタ。コハ $T(x, f) = O(\log x)$ カ有理函数
 テアルタメニ必要且十分ト云フ Nevanlinna, 定理ヨリ直ク出ル。タカ
 有理函数ニ対シテハ $A_1(x, f)$ 方カ $T(x, f)$ ヨリ簡單ト意味ヲモツテ
 ル。タカ。直接ニ $A_1(x, f)$ ノ性質ヲ使テ証明スル。カ順序ダト思ハレ。

$f(z) = \frac{P_1(z)}{P_2(z)}$, ($P_1(z), P_2(z)$ ハ有理整函数) トオケハ

$$A_1(x, f) = \frac{1}{\pi} \int_0^x \int_0^{2\pi} \frac{|P_1' P_2 - P_1 P_2'|^2}{(|P_1|^2 + |P_2|^2)^2} \rho d\rho d\theta \leq \frac{1}{\pi} \int_0^x \int_0^{2\pi} 11 \rho d\rho d\theta + \frac{1}{\pi} \int_{x_0}^{\infty} \int_0^{2\pi} \frac{K}{\rho^4} \rho d\rho d\theta$$

$z = \rho e^{i\theta}$

コハ = K, x_0 ハ十分大キイ常数テアル。何者、 $P_1(z), P_2(z)$ ノ次数ヲ夫々 n_1, n_2
 トスレハ $n_1 \neq n_2$ トルトキハ明カニ $P_1' P_2 - P_1 P_2'$ ノ次数ハ $|P_1|^2 + |P_2|^2$ ノ
 次数ヨリ $\begin{matrix} \text{少クモ} \\ \wedge \end{matrix}$ 低ク。 $n_1 = n_2$ トルトキモ $P_1' P_2 - P_1 P_2'$ ノ最高ニカノ項カ消エル
 タ $\begin{matrix} \text{少クモ} \\ \wedge \end{matrix}$ 低イ。ヨツテ x_0, K ヨ十分大キクトツテオケハヨイ。コレヨリ

$$A_1(x, f) = O(1)$$

$n = A_1(x, f)$ が有界ならば $f(z)$ は有理函数で「 ∞ 」は「 ∞ 」
 示す。仮定より $f(z)$ が有理函数で「 ∞ 」は「 ∞ 」
 特異点となるから $f(z)$ が領域 γ 領域 = 写像スルト云々の性質を用いて
 Weierstrass 定理から、適当な α_0 をとれば $f(z) = \alpha_0$ が ∞ 近傍で無限多
 くの根を持つことは示す。 (例へば「竹内雄三先生：岩波講座、橋田
 函数論 IV, 163-165頁)。モットモ上「 ∞ 」は「 ∞ 」
 の「 ∞ 」が成る可く初等的に証明して「 ∞ 」は「 ∞ 」
 Weierstrass 定理を用いて「 ∞ 」は「 ∞ 」

シカル = 一方、任意の $\alpha (\neq \infty)$ に対して $L_\alpha(f) = \frac{|\alpha|^2 f + \alpha}{|\alpha| (f - \alpha)}$ とおけば

$$\frac{|dL_\alpha(f)|}{1 + |L_\alpha(f)|^2} = \frac{|\alpha|^2 (1 + |\alpha|^2) |df|}{|\alpha|^2 |f - \alpha|^2 + |\alpha|^2 f + \alpha|^2}$$

$$\begin{aligned} |\alpha|^2 |f - \alpha|^2 + |\alpha|^2 f + \alpha|^2 &= |\alpha|^2 (f - \alpha)(\bar{f} - \bar{\alpha}) + (|\alpha|^2 f + \alpha)(|\alpha|^2 \bar{f} + \bar{\alpha}) \\ &= |\alpha|^2 (1 + |\alpha|^2) (1 + |f|^2) \end{aligned}$$

であるから

$$\frac{|dL_\alpha(f)|}{1 + |L_\alpha(f)|^2} = \frac{|df|}{1 + |f|^2} \quad \therefore A_1(x, L_\alpha(f)) = A_1(x, f)$$

(実ハ、 L_α は Riemann sphere 上で「 ∞ 」は「 ∞ 」
 へモットニク。球自身、回転である)

よって筆者、前掲論文 123頁 Theorem I より

$$A_1(x, f) = A_1(x, L_\alpha(f)) = \frac{1}{4\pi} \int_0^{2\pi} \frac{\partial \log(1 + |L_\alpha(f)|^2)}{\partial x} r d\theta + n(x, \alpha)$$

$A_1(x, f)$ は beschränkt であるから、 $\exists K > 0$ ($A_1(x, f) \leq K$)

$$\int_{R_0}^R (K - n(x, \alpha)) d \log x \geq \left[\frac{1}{4\pi} \int_0^{2\pi} \log(1 + |L_\alpha(f)|^2) d\theta \right]_{x=R_0}^{x=R} - \left[\dots \right]_{x=R_0}$$

右辺、第一項は ≥ 0 であるから

$$\int_{R_0}^R (K - n(x, \alpha)) d \log x \geq C(f, \alpha, R_0)$$

$C(f, \alpha, R_0)$ は f, α, R_0 に
 する定数。ここで $\alpha = \alpha_0$ とすれば
 矛盾が生ずる。 $n(x, \alpha) \uparrow \infty$ となる